

PROGRAM

弦楽四重奏曲 第15番 ニ短調 K.421 モーツァルト

弦楽四重奏曲 ヘ長調 ラヴェル

ピアノ五重奏曲 変ホ長調 Op.44 シューマン

四季のコンサート 春

1990年4月16日(月)6:45PM

浜松市民会館ホール

主催：浜松音楽友の会

トヲとの共演は数えきれない。
日本を代表する国際的ピアニストであり、日本の主要オーケストラには1981年と1985年に審査員として招かれている。
楽などの活動を行っている。ウナ・クラバ・コンクール、アジヤの各地でリサイタル、オーケストラとの共演、室内楽など。以来、ニューヨークと東京を本拠に、アメリカ、ヨーロッパを聞き、大成功を収め、ニューヨーク・タイムズで高く評価された。1970年ニューヨークのカーネギーホールでデビュー、リサイタル。第3回ウナ・クラバ・コンクール国際ピアノコンクール第2位入賞。オホーリン氏に師事。1968年海外派遣コンクールに優勝。1969年ソビエト文化省の招きで、モスクワ音楽院に2年間留学。レフ・コ受子氏に師事。第32回音楽コンクール第1位大賞受賞。1966年3歳からピアノを始め、桐朋高校、大学、ソビエト留学まで井野島 稔(ピアノ)

野島 稔(ピアノ)

など多方面で活躍。桐朋学園大学助教授。
ヨーロッパ各地でリサイタル、コンチェルト、レコーディング。オーストラリア、カナダ、ヒューストン・ホルニエに師事。1966年第3回ウナ・クラバ・コンクール第3位入賞。
1966年第1位大賞、海外派遣コンクールで特別表彰を受ける。
桐朋学園音楽科入学。第29回音楽コンクール第2位、第34回音楽コンクール第1位に師事し、「子供のための音楽教室」を経て桐朋学園。安田謙一郎(チェリスト)

安田謙一郎(チェリスト)

欧米各地、日本で演奏し、インディアナ大学助教授を経て、アラバマ大学のクラリネット・バス・リサイタルおよびヨーロッパ・アメリカのコンサートマスターを務める。現在、相愛大学教

ール弦楽四重奏の部長3位。1986年帰国までそのメンバーとして。国際室内楽コンクール第1位大賞。1977年ミュンヘン国際コンクールに師事。
インディアナ大学に留学。ジョセフ・ギンホルツ、ワラント・インディアナ大学入賞。

第37回日本音楽コンクール第1位、第6回ウナ・クラバ・コンクール第1位。第9位。小栗まゆみ(ヴァイオリン)

桐朋学園を経て、シェリアート音楽院に留学。トロシー・サイラーに師事。1971年、カーネギーホール大ホールでデビューした。その後アメリカ各地でリサイタルやオーケストラのソリストとして活躍。国内では1976年東京でデビュー・リサイタルを行ない、絶賛を博した。
現在は、活発なソロ活動の他に、室内楽にも力を注いでいる。

教住岸子(ヴァイオリン・ヴィオラ)

桐朋学園を経て、東京芸術大学で教鞭を取る。現在、桐朋学園。1981年以來、アムステルダム音楽院の教授陣に加わる。数多くの室内楽コンサートの他、ソリストとしても活動を行っている。第1回「ヴァイオリン」を始めた。1983年から日本に居を移し、1989年に東京クワラルトを結成。1981年クワラルトを離れ、桐朋学園、シェリアート音楽院卒。

原田幸一郎(ヴァイオリン・ヴィオラ)

ヴァイオリン



室内楽のタベ
ナーダと野島 稔



●モーツァルト:弦楽四重奏曲 第15番 ニ短調 K.421

弦楽四重奏曲は、その純粋な響きによって合奏曲のなかで最高の形式といわれていますが、これを開拓し、一連の作品によってその無限の可能性を示したのはハイドンです。そして、このハイドンから刺激を受け、多くの作品を生み出すなかでさらに洗練させ、次なる完成者のベートーヴェンに受け渡していったのがモーツァルト（1756～1791）でした。

全部で23曲を数える彼の弦楽四重奏曲のなかで、この第15番は1782年から1785年の間にまとめて作曲されハイドンに捧げられた、いわゆる“ハイドン四重奏曲”の一群に含まれています。モーツァルトの作品のなかでは数少ない短調の作品ですが、それらのなかでもっともベシミスティックな情緒をたたえた名曲です。

●ドビュッシー:弦楽四重奏曲 ヘ長調

ドビュッシーとともに近代フランス音楽を代表するラヴェルは、学生時代に早くも作曲家としてデビューし、有名な「シェヘラザード序曲」や「なき王女のためのパヴァーヌ」などを作曲していますが、それらの作品はなかなか世に認められず、意地になって応募したローマ大賞にもどうしても入賞できませんでした。当時の彼は、エリック・サティの異端者的な作風に心酔していましたし、彼の恩師のフォーレもまた型にはまらない自由な教授法をとっていましたので、そうしてはぐくまれた異端的で進取の精神が、保守的な楽壇から反感を買ったもののようです。しかし1902年に作曲した初めての室内楽——このヘ長調の弦楽四重奏曲によって、ラヴェルはようやくフランス第一級の作曲家として認められ、広く世間の注目を集めることになったのでした。この曲はラヴェルの数少ない室内楽のなかでただ1曲の弦楽四重奏曲であり、失意の時代のラヴェルを励ましつづけてくれた恩師フォーレに捧げられました。

●シューマン:ピアノ五重奏曲 変ホ長調 作品44

ピアノと弦楽器による室内楽はモーツァルトあたりから盛んにつくられるようになりましたが、ロマン派まで含めて、ピアノ五重奏という形式はきわめて少数です。このシューマン（1810～1856）の曲は、ちょうどピアノと弦楽四重奏がひとつになったような編成で、若いころ右手を痛めるまではピアニストになるつもりだったシューマンの作品らしく、ピアノを中心においた作品になっています。しかし、それぞれの楽器のバランスは十分に統制がとられていて、ピアノと弦が織りなすロマンティックな楽想とともに親しみやすい曲となっています。